

保育 実践① 年少4歳児「みてみて・わくわく みんなでおまつりたのしいよ！」

ねらい・自分の気に入った遊びを通して、試したり工夫したりしながらイメージを実現していこうとする。

- ・遊びの中で自分の発想を様々な方法で表現することを楽しむ。

時	保育の実際	教師の援助
事例 1 11 月 上 旬	<p>A児は、平たくした大きな段ボールを海に見立てて、魚釣りごっこをして遊んでいた。</p> <p>釣り竿は、竿はモール、釣り糸はたこ糸、糸の先のエサは毛玉を使い、そこにセロハンテープを丸めたもの（くるりんテープと子ども達は言っている）をつけていた。魚は、金の折り紙をいろいろな形に切ったものと園庭で拾ったイヌマキの実であった。</p>  <p>折り紙の魚とイヌマキの実を海にばらまく。</p> <p>何回か釣ってみる。</p> <p>直接手で魚をつける。</p> <p>T 「なかなかくっつかんね。なんでだろうね。」</p> <p>A児 「僕ちがうの作ろう。」</p> <p>箱、スズランテープ、画用紙を使い、違う釣り竿を作ってくる。</p> <p>自分で釣ってみる。</p> <p>イヌマキの実を釣ろうとするが、なかなか釣れない。</p> <p>セロテープをやめて、ガムテープでくるりんテープを作り釣る。</p> <p>A児 「釣れた！」</p> <p>T 「やったね！」</p> <p>A児 「くるくる巻けるんだよ。」</p> <p>T 「本当だね。魚釣りってくるくる巻くもんね！ Aちゃんここ（釣り糸の先）も違うね。どうして？」</p> <p>A児 「だってガムテープの方が強いけん」</p> <p>T 「そうか、だから変えたんだね。」</p>	<p>○モール、糸、軽い毛玉で出来た釣り竿では、不安定で釣りにくい様子であった。また、イヌマキの実は立体で重さがあるため、なかなか釣れず苦戦していた。薄くて軽い金の折り紙の魚を釣るのは簡単で、重くて立体であるイヌマキの実には難しさを感じていると見取った。</p> <p>○手を使って魚を釣ろうとするタイミングで、A児のつまづく姿に共感し、どうすれば良いのかを教師が言ってしまうのではなく、A児にさらにどうするのか考えてほしいと願いをもち、問いかけの援助を行った。</p> <p>○最初に作った釣り竿に比べ、工夫がたくさんみられた。（リール式、エサの所に重みをつける、ガムテープを使用）</p> <p>○A児は、新しく作った釣り竿で釣れたことに満足感を感じていると見取った。</p> <p>○A児のイヌマキを釣るというめあてが実現したことや、新しい釣り竿の釣り方を工夫したことに面白さを感じているのでしっかりと共感した。</p> <p>○強度を上げるためにガムテープに変えたことに気付きを持たせるために問いかけの援助を行った。（意味付け）</p>

POINT 1
遊びの難しさに気付き
新たなめあてをもつ

POINT 2
今までの経験を活かし
発想し工夫して遊びを楽しむ
もうとする

A児はもう一度イヌマキの実を上手に釣る。

T 「すごいね！前の（釣り竿）はイヌマキ釣るの難しかったもんね。Aちゃんずっと遊んでたけん、いいことに気がついたんだね。いい考えだったね。」



～お話しタイムで話すA児～



B児「僕も作ってみたよ。」

A児とC児が魚釣りを楽しんでいた。それぞれ自分たちの作った釣り竿で遊んだり、魚を増やしたり、形の違う魚を作ったりして楽しんでいた。魚釣りごっこの近くでは、3人の子どもがレストランをして遊んでいた。

A児「たくさん釣れたよ。」

T 「本当だね。何匹いるんだろうね。」

A児「1, 2, 3, 4・・・5匹」

C児「僕も釣れたよ。1, 2, 3。」

A児「僕の方が多い。」

T 「二人ともたくさん釣れたね。この魚どうする？
食べたら美味しいかな。」

POINT 3
自分の遊びと友達の遊びのつながりを楽しむ。

D児はレストラン屋さんになりきっている。

A児「あ、レストラン屋さんがある。」

T 「もしかして、料理してくれるかなあ」

D児「いいですよ。焼いてあげますからね。」

T 「お料理してくれるみたい。お腹すいてきたな。」

A児「じゃあもっと釣ろう。」



○イヌマキが釣れたことに喜びを感じ、また、めあてが実現し、自信をもっているを見取った。

○A児のイヌマキが釣れて嬉しい気持ちに共感し、前の釣り竿ではなく新しい釣り竿にした発想とガムテープの工夫を考えついた過程を褒め、価値付けの援助を行った。

○さらにお話しタイムに取り上げ、実際にみんなの前で釣って見せながら、A児なりの工夫を話したり、友達のしていることに興味をもったり出来るよう、A児やみんなに問いかけながら思いを引き出す援助をした。「すごいね。」「くるくる巻くところがいい。」B児「僕も作ってみたい。」などと友達にも価値づけられた。

○A児の魚釣りごっこが広がり、A児、B児、C児は、自分のオリジナルの釣り竿を作って魚釣りを繰り返し楽しみ、遊びを繰り返す中で、魚が増えたり、魚に工夫をしたりして自分たちの魚釣りを楽しんでいると見取った。

○自分たちで魚を釣ることをしっかりと楽しんでいたり、遊びが積み重なってきていたことを見取った。そして、まわりの友達の遊びにも興味をもつきっかけとなるよう願いをもち、釣った魚を食べたらどうなるかを提案し、力づけの援助を行った。

○A児とC児とD児はお互いの遊びに関心をもち、互いの役割を意識し出して、さらにごっこ遊びを楽しもうとしている様子であった。

<p>D児はお皿に焼き魚をのせ、フォークを添えてA児とC児に出す。 A児とC児は焼き魚を食べる。 A児、C児は「これもお願いします。」 A児とC児が繰り返し魚を釣ってきてはレストランに持ってきている。</p> <p>D児「あ～忙しいな。」 何度も焼き魚を作る。 D児「先生もどうぞ。」 T 「嬉しいな。ありがとう。Dちゃん美味しいよ。 Dちゃんのお店大忙しだね。」 D児「他にもジュースがありますよ。」 A児「ジュースもください。」 D児「ちょっとお待ちくださいね。」</p>	<p>○D児は、ごっこ遊びのイメージの中で店員になりきり遊びを楽しんでいた様子を見取ったので、イメージを大事に出来るよう「大忙しだね。」という言葉で共感し、さらなる意欲を引き出していった。</p> <p>○D児の「ジュースがありますよ。」の言葉をきっかけに、レストラン屋さんにもいくつかのメニューがあることが分かり、さらに遊びが広がった。</p>
--	---

～ポイント解説～

POINT 1 「僕ちがうの作ろう」⇒気付きめあてをもつ、思考力の芽生え

初めA児は、モール、たこ糸、軽い毛玉を使って釣り竿を作り魚釣りを楽しんでいた。しかし、毛玉がふらついたり、セロテープがすぐに剥がれたり、釣り竿の持ち手がモールであるため不安定だったため、なかなか魚が思うように釣れず、難しさを感じていると見取った。手を使って魚をくっつけていたタイミングで、A児に、「なかなかつかないね。」と共感した上で、A児にさらにどうするのかを考えてほしいと願いをもち問いかけの援助を行った。(意味づけ) そのことが、「新しい釣り竿を作る」というめあてをもつ姿につながった。

POINT 2 「だってガムテープの方が強いけん」⇒気付き、発想

A児は、これまでの遊びの経験で、魚がくっつかなくなると、自分の手でセロテープを触って粘着力を確かめて、新しく交換するというやり方を遊びに取り入れていた。それを友達にも知らせる姿があった。しかし、新しく作った釣り竿の釣り糸は魚を引きずりながら巻いていく釣り竿であったため、普通のセロハンテープでは途中でイヌマキが落ちてしまっていた。そこで、ガムテープを試してみるとイヌマキの実を見事釣ることに成功した。強度を上げるためにガムテープに変えたことに対してどのようにしたのかを問いかけ、A児の気付きを明確化させた。(意味付け)

また、今までとは違う新しい釣り竿の釣り方に喜びを感じているのでしっかりと共感した上で、A児がこれまで試行錯誤をしながら遊びを積み重ねてきたからこそその気付きや発想であることを褒め、価値付けの援助を行った。さらにお話タイムで取り上げることで、友達にも価値付けられた。(価値付け)

POINT 3 A児「あ、レストラン屋さんがある。」D児「いいですよ。焼いてあげますからね。」⇒協同、

言葉による伝え合い

一人一人が自分たちの遊びを繰り返し楽しんでおり、それぞれの遊びを積み重ねていた。少しずつ学級全体がごっこ遊びの雰囲気になってきていた。A児の魚釣りごっこでは、遊びに興味をもった、B児、C児が自分のオリジナルの釣り竿を作ってA児と一緒に魚釣りを楽しんでいた。教師は、自分たちで魚を釣ること

を十分に楽しんでいたり、学級全体がごっこ遊びを楽しみ、遊びが積み重なってきていることを見取り、展開計画の期と子ども達の遊びの様子を捉えた上で、まわりの友達の遊びにも興味をもつきっかけとなるよう、力づけの援助を行った。(力づけ) このことが、まわりの友達の遊びに興味関心をむけ、かかわりをもとめたり、役割分担したりするきっかけとなった。その後も、何か困ったことことがあると、レストラン屋さん注文する姿がみられた(ペロペロキャンデーがほしいんですけど、作れますか?など) また、レストラン屋さんは遊びのやりとりの中でメニューがあるとよいことに気付きをもち、自分たちで字を書いたり、絵を描いたりして、メニューが出来上がっていき、友達を意識した遊びへと発展していった。



～レストラン屋さんのメニュー～

成果と課題:教科構想に基づいて本実践を振り返る

本園では、「遊びこむ子どもを育てる」ために、「遊びこむ子どもの姿を見取る」「教師のはたらきかけ」「評価する」を手立てとしてあげている。

「遊びこむ子どもの姿を見取る」については、子どもの学びの姿を「遊びこむ子どもの3つの姿」と幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿と46細目」の視点から見取っていくと次のような遊びこむ姿がみられた。

「気付きめあてをもつ姿」では、くるりんテープの粘着力を指で触り、自分の感覚でテープの取り替えのタイミングを考える力、より強度の強いくるりんテープを追求する姿、おもりの部分が軽い物より画用紙を四角に折りたたんで重みをつけるという工夫、より楽しめるリアルな釣り竿の工夫(リールで巻く)という姿がみられた。

「発想し試す姿」では、友達に触発され、オリジナルの釣り竿を自分なりに考えて作る姿、魚釣りごっこ遊びを楽しみ発想を重ね継続して遊ぶ姿、難易度をつけて遊ぶ姿、釣り竿の工夫、おまけがもらえるゲーム性の導入、海の工夫(海の火山、波、橋など)などのように遊びが広がったり深まったりすることを楽しむ姿がみられた。

「協同する姿」では、友達のしている遊びやことに触発され遊びがつながっていく姿、学級みんなが誰の釣り竿か知っているという姿、友達の遊びを知ったり興味をもったりなどかかわろうとする姿、イメージを共有しながらごっこ遊びの世界を楽しむ姿などがみられた。

「教師のはたらきかけ」としては、事例のような教育的瞬間を言葉から見取って行った支援の積み重ねが、子ども達の遊びこむ姿につながってくことを援助しながら実感出来た。また、4歳児のごっこ遊びは、一人一人の遊び込みがまずは大切であった。その上で、友達への興味関心が広がる時期に、遊びのイメージが広がっていけるよう遊びの場を可視化したマップを作り援助したり(写真①)、また、必要に応じて、友達の興味のあることをみんなで共有し、友達の遊びに興味をもつきっかけ作り(写真②)をしたりして援助した。



～マップを使って話すC児(写真①)



～みんなでイヌマキの実を探そう(写真②)～

また、一人一人が安心して自分の遊びが出来る、自分なりに表現出来る信頼関係づくりのために、職員間で子どもの育ちを共通理解したり、保育記録をもとに週案に一人一人の見とりや願いを細かく分析したりすることで、さらに援助を明確化していった。(教師の保育のメタ認知) また、遊びの中での教育的瞬間を見取っていき、子どもの思いを引き出していく保育を重ねることで、「なんでもたんぼぼ王国」

(子ども達が付けた学級のごっこ遊びの名前) が子ども達の大好きな遊びになった。「こどもまつり」では、誰がどこで何をしているのか、遊んでいる道具が誰のものなのかもみんなが知っているという関係性が出来あがった。また、三学期にも「なんでもたんぼぼ王国」を思い出して遊びを楽しむ姿もみられた。このような4歳児なりのごっこ遊びが、5歳児の友達と協同していくごっこ遊びに繋がると考える。

「評価する」については、保育記録をもとに、教師間で子どもの姿や援助について話し合ったり、週案を工夫したりして自分の保育を振り返ることが出来た。そうすることで、見取りが十分でなかったり、教師が先走って援助してしまったりすることに気付きをもつことが出来、自分の保育を再構成し、次へ活かすことが出来た。また、記録をとって行く中で、4歳のこの時期のごっこ遊びでは、自分がしていることに気付きをもち、さらにそこから発想したり工夫したりしていく姿がたくさんみられ、一人一人の遊びが充実していくことが大切であることがわかった。そのための教師の援助として、子どもの思いを引き出したり、満足感を味わわせた上で意欲的に遊びを工夫したり出来るように願い、共感した上で、問いかけたり、過程を褒めるといった「意味付け」「価値付け」の援助が効果的であると感じた。

今年度は子どもの言葉から保育を見取っていき、記録していくことで、より子どもの具体的な姿を事例に取り上げることで幼児理解を深めることが出来、記録の大切さを実感した。ただ、記録をとって行く中で、取り方や残し方によっては、さらにいろいろな視点(10の姿、期、遊びの追跡など)をもち、記録を活かすことが出来ると実感した。今後、評価を保育に活かすためにも、記録の活かし方を検討していく必要があると感じた。

(小川 千秋)